

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

平成22年8月31日

財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 人間・環境学研究科

職 名・学 年 博士後期課程 3年

氏 名 大 山 万 容

事業区分	平成22年度・国際研究集会派遣助成	
研究集会名	第10回ランゲージ・アウェアネス国際大会 Association of Language Awareness 10th International Conference Awareness Matters: Language, Culture, Literacy	
発表題目	Attitudes toward entrance examinations and students' beliefs regarding English	
開催場所	ドイツ・ヘッセン州・カッセル・カッセル大学	
渡航期間	平成22年7月23日 ~ 平成22年8月1日	
成果の概要	タイトルは「成果の概要/報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料:無	
会計報告	交付を受けた助成金額	200,000 円
	使用した助成金額	200,000 円
	返納すべき助成金額	0 円
	助成金の使途内訳 (使用旅費の内容)	交通費:150,000円 宿泊・滞在費の一部:50,000円

平成 22 年度国際研究集会派遣助成 成果の概要

平成 22 年 8 月

人間・環境学研究科 博士後期課程 大山 万容

平成 22 年 7 月 25 日から 28 日にかけてドイツ・カッセルで行われたランゲージ・アウェアネス国際大会（10th International Conference of Association of Language Awareness: Awareness matters: Language, Culture, Literacy）に出席した成果を報告する。本会議はイギリスに本部を置く ALA 学会の主催するもので、言語意識に関する国際学会としては世界最大規模であり、2 年に一度開催されている。今回は 40 カ国以上から約 200 名の参加者があり、少数のドイツ語による発表を除いて殆どの発表は英語で行われた。

1. 言語意識研究における 2 つの柱

本学会には言語意識（Language awareness）が言語の学習に与える影響についての研究が集められる。このテーマには非常に幅広いアプローチが可能であるが、それらは大きく 2 つの柱に分かれると思われる。

ひとつは第二言語習得研究に関するものである。これはもともと 1960 年代に軍事的要請から米国を中心として盛んになった研究領域であり、外国語をいかに効率的に学習できるか、その方法の解明が研究の目的となる。研究の対象には第一言語習得、すなわち母語の習得も含まれているが、研究の総数としては第二言語習得を扱うものが圧倒的に多く、またグローバル化の当然の帰結として、対象言語を英語にした研究が大多数である。今回の研究大会では、幼児・初等・中等・高等教育および成人教育の各段階において学習者の言語意識を高揚させるために教師・学習者それぞれが採用する様々な方法（たとえば focus-on-form, media-use, dialogical approach など）の紹介、およびその学習効果に焦点を当てた研究が多く報告された。コミュニカティブ・アプローチなど従来の方法論を扱う研究も多い一方で、オンライン・モニタリングなど新しいメディアを活用した教育法による発表も目立った。また学習者自身の言語学習に対するメタ認知（学習者としての認知、対象言語への認知、社会的認知）、態度、メタ言語能力（文法知識）、音声認識能力、学習者信念といった要因に着目し、それらの要因と学習過程・達成との関係を調査したうえで、より効率的な言語教育に関する示唆を与えようとする研究もあった。後述するように申請者の発表もこちらに分類されるものである。特に日本国内の学会で報告される第二言語習得研究は、統計的方法に基づく量的研究によるものが一般的であるが、本学会では少人数の学習者クラスに密着して個々の学習者の学習過程を詳細に描き出す質的研究も少なくなかった。

言語意識教育にかかわるもうひとつの柱は多言語主義的観点に基づくものである。これはたとえば英語のように、ある特定の言語を習得するための効率性を追求するのではなく、学習者に、母語をも含めた広い意味での言語一般に対する理解および感受性の涵養を目指すものである。今回の学会では、多言語主義的研究だけではなく、今回の学会ではテーマに Culture および Literacy という概念が含まれていることから、多文化主義な視点の獲得に主眼を置いた研究も少なからず見られた。このような研究は、イギリスで起こった言語教育改革を目指す草の根運動に端を発する言語意識運動（Movement of Language Awareness）のそもそもの理念とも一致す

るものであり、さらに近年になって研究が盛んになってきた「世界語としての英語: EFL(English as a Lingua Franca)」の理念、すなわち英語を多言語のうちの一つとして相対的に捉えた上で学習を構築する動きとも親和的なものである。今回 ALA に参加したことで、先にあげた第二言語習得研究に関してだけでなく、日本ではグローバル化の只中にありながらもいまだに必要性があまり認識されておらず、したがって研究自体あまり行われてきていないこのような多言語主義的研究についても知見を深めることができたのは大きな収穫であった。特に申請者の興味を引いたものには、初等教育において外国語学習が導入する際に、それを単に成人の外国語学習の延長線上で捉えるのではなく、言語の多様性への意識を高揚させる機会ととらえ、そのための効果的なカリキュラムを研究するものである。来年から本国でも初等教育に英語が組み込まれるが、いかなる国際教育も実際にはローカルな文脈の中にしかあり得ないという事実を鑑みれば、このような言語意識教育の重要性はより増してくるということが認識された。

2. 申請者の発表

申請者の発表は、日本において入試試験の傾向が大学入学者の信念にどのように影響するかということ調査したケース・スタディである。近年の研究から学習者信念は学習者の採用するストラテジーに深く関連していることが知られており、また学習過程および達成に影響することから、重要な研究対象となってきた。一方で、学習者信念は文脈依存的であることも知られてきているが、このような学習者信念を形成・あるいは変化させる要因についてはまだ分かっていない。中等教育と高等教育の節目に位置する大学受験に着目して調査を行ったところ、ある試験の形式にどれだけ長く取り組んだかによって、英語学習において重要であると考えられる能力についての学習者信念には有意な差がみられた。また、リスニングテストはただそれを課すことによってリスニングの重要性が認知されるわけではなく、場合によっては逆効果の効果が得られるという事例を示すことになった。これらの知見は学習者信念に関する研究およびテストの分野において重要である。

発表の場ではスウェーデンの Mats Deutchmann 氏により、北欧の教育水準が高く国民の英語運用能力が高いとされる国においてもやはり、受験という機会がコミュニケーション能力に対する学生の信念にネガティブな影響を与えていることが知られているとの指摘を受けた。さらに様々なミーティングの場などで知遇を得た研究者からコメントを受けることができた。学習者の信念および心的態度に関する研究が重要であることについてその他の研究者たちと意見の一致をみることができたのは大きな収穫であった。

質問

1. なぜ文科省はコミュニケーション能力の発展に力を入れてきたのに実際にはそれが身につけていないのか？

基本的には、「必要ではないから。」日常生活にも困らないし、高等教育は日本語だけで修了できるし、企業においてもいまだに英語の必要性はこの 10 年ほどで言われ始めたばかり。教育が対応するにはまだ時間がかかる。さらに、「より良い労働環境を勝ち取る」という功利的な目

標のみで生徒のコミュニケーション能力に対する意識・学力が変わるかというのは、大きな問題。それでも中等教育の先生方は現場で非常な努力をされていると思う。その努力にもかかわらず、受験経験によって生徒の信念が変わってしまうことが問題であり、今回の研究はそれを明らかにしたものだ。

2. センター試験にリスニングが出題されているが、それはどのように関係するのか。

今回の研究では残念ながらセンター試験の影響までは調べていない。ただしセンター試験はほとんどすべての受験生が受験するものであり、特にトップランクの大学を受験する者にとっては、「簡単」に感じられていると思われる。

それでもトップランクの学生は満点近くを取らなくてはならない。これについては？

分からない。しかし全ての学生が受験するテストなので、リスニングを受験した学生と受験していない学生の間で比較するには、学年の異なる学生を調査する必要があるだろう。これでリスニングをより重要だとする信念が増えていけば、リスニングテスト導入は成功であったと言えるだろう。しかし、今回の調査で明らかになったように、リスニングテストが課されれば、自動的にリスニングを重要視するようになるということではない。経験的調査が必要だ。

3. スウェーデンでも同じような状況は見られる。学校ではスピーキング・リスニングを重要だと言われるが、実際に重要な試験ではリーディングが殆どなので、学生はリーディングを必死に勉強することになる。

これは多くの学生が受験する試験の宿命かも知れない。たとえばリスニング試験が全体の50%を占めるようになれば、状況は変わってくるかもしれない。

それでもスウェーデンの学生は結構英語を使えるけど？ 日本では？

日本の学生は非常に長いあいだ英語を勉強させられるが、使えないと言われている。だから文科省が「コミュニケーション能力の重視」を云うことになった。しかしもともと必要性が無いうえ、文科省のアナウンスだけで何かが変わるとするのは難しい話だ。

やっぱり受験はみんな必死で頑張るので、良い受験問題を作れるならその方がいいよね。

LET 質問：

1. **英語力をどのように定義するのか。**：文科省の強調するところではコミュニケーション能力ということになる。4技能。しかし受験では翻訳力が試されるところが問題。和訳 = 英語力と思うことが問題。

2. **経年変化はあると思うか。**：実際の英語経験などにより可能と思われるが、英語経験が得られなかった場合には、コミュニケーションへのモチベーションが下がった状態から始めなくてはならないので、問題が多いと思われる。

3. **学部により違いはあるか？**：試験問題により違いはあったが、他は特に比較していない。

4. **京大の問題は英語力というよりは思考力を試していると言われるが。**：それも一つのテーマだが、今回は扱っていない。

5. 発音はどのくらい重要なのか? : EFL の観点から云えば発音は問題ではないと言われている。しかし私が問題にしたかったのはもっと basic な問題。shi と si の違いなど。私は日本人の発音は「意思疎通ができないほどに悪い」と感じている。そこだ。

田地野先生のコメント :

受験について調査しても「誰が喜ぶのか? 誰の役に立つのか?」 入試の backwash effects に関する研究はひたすら国内レベルだ。つまりローカルだ。たとえば TOEIC の問題でどのようなタイプの問題ならば解けて、どのような問題ならば解けないか、ということで調べると、より一般的だ。

「発音が重要という意識を持っていれば、負の波及効果が軽減される」という結論についてはどうでしょう? ノーコメント。

金丸氏との talk より :

・ローカリティについて

京大の問題をどうにかする立場に無い以上、京大の問題に限定して調査を行っても無意味(つまり実効性がない。) 東大、阪大などと比較してみても、それらが限定された大学であり、受験生がどの大学であるかを意識している限り、信念変化には入試問題の内容以上の要因が介在する。したがって、より実験室モードで、どのタイプの問題を意識して勉強した学生がどのような信念変化を経たのか、を調べる方が、よりニュートラルである。

・一つには、IBT を基準に入れる大学院と、TOEIC を基準にした大学院で院生の信念に違いがあるかなど。(でもこれも、どの大学院を目指しているかという点でローカリティに陥る可能性あり。)

・実験室ベースでやる場合、どのような報酬にするか、実験デザイン確定には先行研究の調査が必要。日本人がどのタイプの報酬にどのような反応を示すかなど。あまり熱心にやってくれなくても、外れ値は除外して統計的に処理すれば大丈夫。10人ずつの調査でも結果は出るだろう。

・語彙力の違いについて。受容的語彙レベルと再生的語彙レベルの調査では、学部1回生を対象に調査したところ、再生的レベルは受容的レベルの3分の1以下であった(田地野2007)。このレベルの調査では、京大生であろうとなかろうと関係ない。他の大学生と比較してもそれほど差は出ない。(そうかな? 京大生はやっぱり英作文よりは和訳中心で、しかも英作文では自分の好きな表現で書けばそれで良いので、それが影響していないとは言いきれないのでは? 東大生だったらイディオムなどの再生力が高いかも。それが逆転することは無いにせよ。)

・発音よりもイントネーション: インドやシンガポールでは「正しい発音」ということは意識されない。通じさせられればよい。日本人に欠けているのはむしろリズムやイントネーションではないか。「通じさせる」ということは、つまりコミュニケーションに対して前向きであるということ。「発音を重要であると思うかどうか」ということによって、どれだけコミュニケーションに対して前向きであるかどうかを聞いていたように思える。つまり、相手にとって理解可能な

英語を発話することの重要性ということ。そしたら確かにスピーキングやリスニングの重要性も高く評価するだろう。だから、発音指導が大事というよりも、発音に代表されるような「聞き手への配慮」が真に重要なのだ。

・だから一つには、リスニングを課すだけではダメだということ。リスニングの量によっては、むしろ負の波及効果を強めているということはハッキリ分かった。問題は、どれほどの割合を出すかということを決めるための、はっきりとした調査だ。

・では韓国の学生と比較してみるというのはどうか？ 韓国人の階層やら受験の位置づけやらとにかく要因が多すぎるので単純な比較は実効性が低すぎ。却下。

- ・ ALA に出してみる？
- ・ LET に出してみる？

Why has the entrance exam not changed for such long years, if there have been criticisms against the translation-oriented test?

One reason is that the university's policy about entrance examinations is not opened: it is assumed that they don't have the accountability for the content of the examination. Another reason is concerning the tradition. Since 13th century, Japanese have been translating from foreign language. For a considerable time, it was Chinese that was the source of knowledge, culture, and information. After Japan opened itself to Western countries, it was English, German and French that the Japanese had to translate. So in Japan, translating skills have been considered equal to intelligence. That is why many universities require students to translate from English, still today.

・学習者にとってどのような種類のメタ言語 (Metalanguage : 文法用語) が役に立ち、また難しいと感じられるのか、そしてそれが L2 の処理にどのような役割を果たすのか。proficiency とどのように関連するか。

メタ言語 test : 文法範疇の名前、文法用語、正確さ。抽象用語の理解が非常に低い。それは加算・非加算の区別に慣れていないから。(school のように C, U 両方の用法のある語について理解していない。)

・EMK(Explicit Linguistic Knowledge : abstract and analyzed knowledge of grammatical rules perceived to underlie language use that is more or less subject to conscious representation : 使用者によって言語化されて使用される抽象的かつ分析的な文法規則) は proficiency とどの程度関係しているか。(研究はまったく異なる結果を引きだしている。)

結果：

メタ言語知識と EMK の関係は中程度。

メタ言語知識は EMK の指標としての役割を持つ。

proficiency との関係性は直接的ではないにせよ、少なくとも EK の一部である。

EMK と proficiency の間には関係がある部分もある：TOEIC のリーディングとは関係あり。しかしリスニングや語彙、TOEFL のリーディング、ライティングとは関係が薄い。

EMK \neq proficiency、EMK の役割はインプット、気づき noticing,そしてフィードバックにある。

教育への示唆：proficiency を伸ばすためには学習者の EMK を伸ばすことが必要。伝統的文法教育はより文法への「気づき」を促すものへと変わるべき。